

留学を終えて

関高等学校 上垣 茉穂（メキシコ）

メキシコに留学した1年間は、私の今までの中で一番苦しく、しかし一番貴重で大切な時間だった。この1年で、語学の習得のみならず、人間としても一回り成長出来たのではと思う。今回は、私がメキシコで得た異文化理解の考えと人々とのつながりの温かさについて書きたいと思う。

私はメキシコのユカタン半島に位置するメリダという街で1年を過ごした。メリダはメキシコの中でも比較的治安もがよく、マヤ文明やユカタン半島独自の文化の特色を持つ地域である。私がメリダに来てまず思ったことは、想像よりもかなり発展した街だということだ。ショッピングモールなどの施設が多くあり、充実していた。その反面、**Centro de Mérida** と呼ばれる昔ながらの街の中心地は、生活感溢れる雑多な雰囲気がある場所である。日曜には毎週催し物があり、伝統的なダンスの披露や職人達の工芸品や民芸品がたくさん市場に並ぶ。観光客だけでなく、地元の人もよく来る活気ある場所だ。私のメリダの中で大好きな場所だった。街中へ行くと、日本人、アジア人としての扱いを受けるが、メキシコ人はみんな私に温かかった。初対面でも場所を案内してくれたり、いろんな話を聞かせてくれたりと、快く私を助けてくれ、一瞬の出会いから生まれる暖かな関係がたくさんあった。そんなメキシコ人が好きだし、心温まる出会いが多かった。

反対に驚いたのは、バスや道路の整備が不十分だったことである。特にセントロ行の床の隙間から地面が見えるようなバスに乗るのは、最初かなり怖かった。「日本は凄くきれいだよね」などと街の人からもよく言われたが、それが当たり前だった私にとって新鮮だった。また、街にはお金や仕事のないいわゆる物乞いのような人達がいた。これは日本では見ない光景だったので、とても心が痛んだ。彼らに何も出来ない私は、メキシコの貧富の差の現状をホストファミリーに聞いたり調べたりして、一定数の人が生活に苦しんでいることを知り、そこで初めて、学校の活動などで知っていたつもりだった「貧困」という現実を見た。これがきっかけで私は数か月間、食事に困っている人にご飯を提供するボランティア活動や、格安で日用品を売る団体のボランティア活動に参加した。そこで、生きるために一生懸命な彼らを見て、心を動かされた。「ありがとう」と深く感謝をしてくれる彼らに、なんとも言えない気持ちにさせられた。驚きはあったが、メキシコを嫌いになったのではなく、知らなかったことや考えもしなかったものに触れられたのは良かったと思う。これらのことは、日本というコミュニティで生きてきた私には異文化であり、私自身の考え方や視野を大きく広げるものになった。

また、留学では欠かせないのがホストファミリーや現地での学校生活である。スペイン語が満足に話せないうちからよくしてくれたファミリーや学校の友達には、本当に感謝している。不安でいっぱいだった私をハグとキスで迎えてくれたファミリーや、私のために授業やスペイン語の練習に付き合ってくれた友達の存在が私の留学生活を支えてくれた。

私の通っていた学校は、私立で1クラス20人ほどという小さな高校だった。始めは授業について

ていけなくて大変だったが、友達のおかげで段々理解もできるようになった。特にメキシコ史の授業では、プレゼン発表があり本当に辛かったのだが、私が何とかやり切った後にはみんながいつも拍手して褒めてくれた。その時が、頑張ってよかったと思える瞬間だった。学校行事であったインターナショナルデーの日には、クラスみんなで折り紙を折ったり、教室を日本風のもので飾ったりした。みんなが日本に興味を持ってきて、みんなで着物を着たりして、とっても楽しい活動をする事が出来たし、学校中で日本の文化を理解してもらえたので良かった。実は、これより前にスペイン語ができなくて、もどかしく落ち込んでいることがあった。それをクラスメイトに話したときに、彼が「No te preocupes, Maho」（大丈夫だよ、僕たちはいつでも助けになるよ）と声をかけてくれて励まされたことがあった。出来なくて落ち込んでいてはだめだし、気楽に行こうと思えてすごく楽になったのだ。その温かさが嬉しかったし、国を超えて本当の友達ができることは素晴らしいと思った。他にも、特に学校では多くの友達ができ、みんなが、私がメキシコらしい経験をできるようにと言ってお祭りに連れて行ってくれたり、みんなでパーティーをしたりと楽しい思い出がいっぱいできた。

また、学校の友達だけでなく、何度もあった AFS（留学主催先の国際教育交流団体）のオリエンテーションや旅行を通して、私は世界中に友達を作ることができた。その中で、メキシコだけでなくいろいろな国のことを聞き、文化の多様性を学んだ。他国から見た自国や自国から見た他国というのは、意見も様々で面白かった。出会ったころは英語で話していた彼らとも、最後にはスペイン語で流暢に思いを伝えあうことが出来たことも素敵な経験だ。

もちろんホストファミリーとの関係もとても大切なものだ。私は3月ごろにホストチェンジをしたのだが、彼らは本当に私によくしてくれ、私と本当の家族のように接してくれた。彼らは日本をよく知らなかったので日本料理を作ったり、たくさん日本について話したりとお互いの理解を深めながら過ごした。また親戚みんなと出かけたり仕事を手伝ったりと本当の家族と同じように過ごした。そして、いつも「Mi hija」（私の娘）と呼んでくれて嬉しかった。ホストブラザー達とはサッカーをしたり、勉強を教えてもらったりした。きっと留学生全員に言えることだが、私にとってもファミリーとの繋がりは日常の中でも大切なものになった。

そしてやはり、メキシコの人との関わりでは、挨拶するときにはハグやキスをし合うことが多い。人と人との繋がりはハグとキスで始まる。これこそ、私が一番に異文化を感じた習慣である。始めは本当に慣れずに戸惑うこともあったが、この直接的な表現がメキシコ人の暖かでフレンドリーな性格につながっていると思ったし、私もメキシコ人として挨拶をするようになった。

これらのかけがえのない経験を通して、私は留学に行く前と今現在では変わったと思うし、何より私のなかで第二のふるさとの出会えたことは大切な財産である。また、あんなにも難しかったスペイン語を思いのままに使えるようになったことは、目に見える成果である。これから困難があっても、この経験を糧にして生きていきたい。そして、今でも交流のあるファミリーや世界中の友達ともこれからもずっと関係を続けていきたい。今後は、学業と並行して、岐阜県のボランティア活

動に取り組みたいと考えている。そして将来的には、現地で感じた貧困層の方を支えるなど、この留学を活かした進路を考えている。

最後になりますが、支援してくださった岐阜県教育委員会の関係者の皆様に感謝いたします。